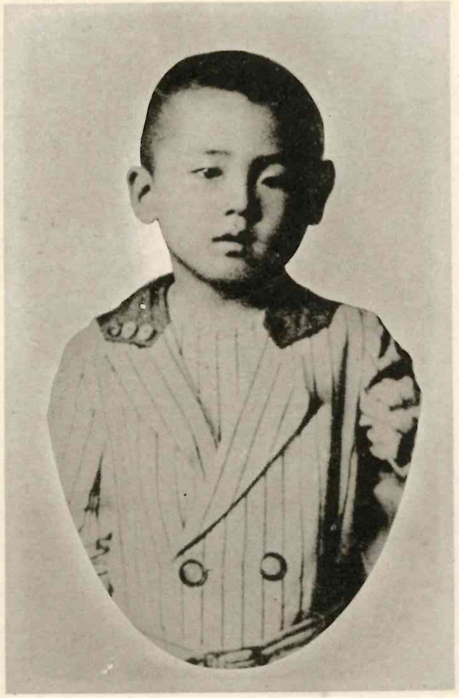
小草

小草(をぐさ)



はしがき

これは愛兒を喪ふた父と母とのありのまゝの言葉です。

宗教でもありません、藝術でもありません、たゞおのづから胸奥を破つて出た、言はないでは居られないこゝろです。

悲しみに閉ざされた眼に、脣に、強くも閃き響き來る斷片(きれぎれ)的な心の影、心の聲。私だちは路傍

にノートを展き、枕頭にペンを捜つて、この儚ない記念碑をつくることをしました。

「みめよい子は早く死ぬ」
「かしこい子は早く死ぬ」

これは事實に敎へられて出來た諺でもありませうが、それよりは寧ろ、その在りし日にもまさる親の愛の現はれであらうと思はれます。かうして、彼等はさながら泡沫のやうに消えても、みんな愛の天國に在る者、永遠に生くる者です。

共に泣かうために
たゞ共に泣かうために
同じ涙をもつ多くの人々のものとしたい心から、
この愚かしいものを公けにします。

大正八年六月四日

著者

再版の喜びよ！

先づ之をわが親しき初版の讀者に頒たん

この大きな悲しみも
この大きな淋しみも
忘れてゆくこゝろの自然
うすれてゆくこゝろの自然、
そのしぜんをやぶらうとするこゝろ、
これぞわがたましひ
これぞわがいのち。

目次

信よ
悲しき日
墓
こゝろ
思ひ出
きのふけふ
夢

信（まこと）よ

こゝに集めたのは、私達が亡き兒の遺骨に向つて、墓に向つて、寫眞に向つて、そして自分の裏なる彼に向つて云はうとし、或は云つた言葉です。

私達はよく私達の心に睡つてゐる愛兒の名を呼びます。無意識に彼の名を口にする時、それは習慣から來てゐることもあります、淋しい心が呼ぶともなく彼の名を噺いてゐることもあります。どちらにしても私はそれをうれしいことに思ひます。

どうしても彼の名を呼んで私達の心を告げなければならないと思ふ時があります。その時私達は涙なしに云ふことが出來ません、それがたとへ嬉しいようなことがらでも。

嘗て列車の中で姉へのハガキに、墓地へ向つて信よと一言呼んでやつて下さい（墓、九）と書いた時、私はその言葉に自ら泣いて、赤羽から上野まで顔をあげることが出來ませんでした。信の小父さんの玉虫に、信の永眠記念に求めた本へ何か書くようにと云はれた時、私は信、信、信と書きました。「これが一切をつくしてゐる」と。

彼もその名を呼ばれないことは淋しいでせう、悲しいでせう。

男信は私達の長兒です。大正四年五月十六日に東京市四谷區西信濃町五番地で呱々の聲を擧げました。世を去つたのは昨大正七年の十一月四日で、同市麴町區三番町木澤病院の病室に居つたのです。三年半ばにも足らぬ短かい生涯でした。

八ケ月にも滿たずに生れた、五百二十匁よりない小さなからだは、胎を出た其時の外、殆ど一ケ月ばかりも泣くことすら出來なかつたのです。醫師、産婆、知人の皆望みを絕つたなかで、たゞ〱父と母との愛の一念によつて育てられた彼は、其間幾度か生死の境に彷徨ひながらも、遂にすぐれて大きく健やかなものとなつたのでした。寫眞ばかりを見る人も、どうしても六歳下とは思ひないと云ひます。あゝ、今これを思ふては慰め、これを思ふては悲しみます。

一

信よ。あなたは死んだのか。
おゝゝ、あなたは死んだのではない
死んだのはわたしだ。
こゝに生きてるのはあなただ。

二

私が泣くとき
信の涙よ、私の瞼に入れよ。
私が働くとき
信の血よ、私の心臟に灑げよ。
信よ。
私のすべてに
あなたのすべてを加へよ。

三

信よ。
私の第一の滿足はあなたを思ひ出すことだ。
朝から晩まであなたのことを思ふてゐたい
たゞあなたのことを話してゐたい、
私の心をすつかり明け放して
そこをあなたの安らかな住ゐとしたい。

私は朝から晩まで
口で心であなたの名を呼んでゐる、
あなたが返事をするのなら
こんなに呼びはしなからうと思ふまで。

或る時は、あなたは天に居るような氣がする
墓場に居るような氣がする
寫眞のうちに居るような氣がする、
どうしても私の心にはいつてこない
どうしても私の靈（たましひ）にはいつてこない。
私はいら／＼して涙も出ない程に狂ほしくなる、
あらゆるものが呪はしくなる
心が墓場の闇よりも暗くなる。

或る時は、オルガンへ向へばそこにあなたが居り
庭へ下りればそこにあなたが居り
食卓へ向へばそこにあなたが居り、
そして私が笑へば笑ひ
私が泣けば泣いてゐる。
私はあなたがどこへ行つたのでもないことを思ふ、
この無邊の空間（そら）にさまよつてゐるのでもない
この無限の時間（とき）に流されてゆくのでもない
かぎりないいのちもて私達と一緒に居ることを思ふ、
世界がみんな感謝と愛に燃える
心があなたの顔のやうに明るくなる。

信よ。
私は嘗てあなたのからだを抱いた
あなたは今私の靈を抱いてゐる、
私は嘗てあなたの手をひいた
あなたは今私を永遠の國へ導いてゐる、
私はあなたの懷から起き出る、あなたの懷へ睡る。
私の心に一つのひとゝきの起るとき
あなたはすぐその善と惡とを正しく聞きわける、
あなたは悲しい私を慰める
あなたは淋しい私を勵ませる。

信よ、三

信よ。
弱いあなたのからだは死んだ
弱い私のこゝろは死んだ、
強い私のからだはのこつた
強いあなたの靈はのこつた。

四

マコちやん。
あなたへお花をあげるようにと、
たくさんの人のくれたお金、
――あなたのこの世で見たこともないたくさんなお金、――
あなたはさぞうれしいでせう。
マコちやん。
あなたへあげるお花は
お父さんがお俥へ乗るのを乗らないで

夜ル人に頼まれた書きものをして
さうしたお金で買ひませう。
來年からは庭一杯に花をつくつて
お父さんとお母さんのたんせいした
お父さんとお母さんの咲かせたお花をあげませう。
かう思ふてお父さんは
そのお金はみんな神さまについてのご本を買ひました。
マコちやん。
お父さんは又何かお仕事をして
そのお金で小さい、けれどもきれいな本箱を買つて
あのエス樣の額の下にそれを据えて
そこへこのご本を一杯入れて

そして一ばん上にはマコちやんのお寫眞を飾りませう。
マコちやん。
かうしてお父さんは
エス樣の尊といお顔を見て
あなたの可愛いゝお顔を見て
立派なご本のならんだのを見て、
そしてしんからこゝろをきれいにして、
また遇ふときを待ちませうね。

五

マコちやん。
お母さんはあなたを愛してゐました
しんからほんとに愛してゐました。
けれども、マコちやん。
あなたはもつとどんなに〳〵
このお母さんを愛してくれたでせう、
お母さんはそれを考へると
どうしていゝかわかりません。

六

マコちやん。
お母さんはあなたのお骨へむかつても
さよならといふことが出來ないのです。
おゝ、さうです。
マコちやんとお母さんとの間には
いつまでも〳〵、さよならといふ時は來ないのです。

七

信よ。
――あなたのお寫眞は、もう寫眞ではない、あなたなのだ。――
サ、いつものように
お父さんのお胸の肌へ、すつかりとおつきなさい。
このお父さんの心臟へ
あなたのいのちがかよふように。

（睡に就かんとして）

八

信よ。
あなたと一緒の日はほんとに短かかつた、
歌ひ、笑ひ、たのしむうちに
たゞ夢のように過ぎ去つたのだ。
あゝ、けれど
今、私のあたりを見ると
私のこゝろを見ると
あなたの振撒（ふりま）いて行つた花で一杯だ。

信よ。
私の一番悲しいことは、
私の愛の足りなさ、愚かしさ、貧しさが
あなたの此世の幸福と、大切な生命とを失はせたのではなかつたか
といふことだ。
私はしんからあなたのお友達になつて遊んであげたことが幾度あつ
たか
あなたのためにどれだけのいゝことをしてあげられたか、
それを思ふとあなたの名を呼ぶことすら苦しい。

信よ。
けれども私はまた信ずる。

あなたの天國はどこにあるのでもない
やつぱりこのお父さんお母さんの衷にあるのだ、
私のあなたへの愛は足りなくても
あなたの私への愛は絶對なのだ、
あなたのおからだの一日一日大きくなるように
一日一日深くなつた私達の愛は、
今から一層强められ、清められて
そしてみんなをつなぐ靈なのだ。

信よ。
思へば悲しみも切である
けれども感謝はそれよりも切である、

信よ、八

あなたを與へられたといふことにまして
私の享けた祝福はないのだ。
信よ
私の永遠の愛兒よ。

悲しき日

臨終 （通夜の晩、病氣と心痛とに打臥してゐた私が床中で書いたものゝ中から）

あなたのお脊中へ、あのいた／＼しい食鹽注射をして、おからだが張り裂けまいかと思はれるばかりに腫れ上つた時すら、たゞどうかして生かしたい一心に瞬きもせずに見て居りました。あなたも生きて居たかつたでせう、私達の目には心には、どんなにしてもこのからだをお父さんお母さんの傍へ置きたいと思ふて悶えてゐるに違ひないと思はれました。何んにも知らずに、何んにも思はずに居るとは、その脈、その呼吸に觸れてゐる私達にどうして思はれませう。…………

静かなところがいゝ、信ちゃんはお父さんとお母さんの外には氣兼がある。かうして私達二人がついて居れば、信ちゃんはそれを何より喜ぶ。もう誰も呼ぶまい、泣かれるのがいやだ、ものを言はれるのがいやだ、静かに静かにと、お父さんはあなたの右の手を、お母さんはあなたの左の手をとつて、そしてその微かな脈が自分達の指先からからだ中へひゞいて行くのを感じてゐました。待ちに待つた二回目の食鹽注射のとき、あなたが頭を少し擡げて苦しさを訴へ、足を曲げて痛さを知らせたのと、血の交つた吐きものゝ止つたのとで醫師は少し眉を開きました。お父さんは嬉し泣きに泣きました。「アア癒る癒る」と云つてお母さんの手をとつて、今までこらへ／＼てゐた涙も一緒に、ぞんぶんに泣きました。けれどもそれも一時、脈搏は少し緊張したとは云へ、呼吸は耳だつて苦しさうになりました、急になり劇しくなりました、酸素吸入器をかけてゐることが却つて無慈悲のように思はれるほどに。そして意識はまだ昏々として深く深く沈んでゐました、どうしてこれが又お父さんと呼びお母さんと呼ぶようになりませう、もしそれができたとしても、どうして其後に堪へられませう、あゝ、もう美しいうれしい事しか知らないお頭が、すつかり傷んでしまつたのでした。…………

「あなたはほんとうによい子でした。あなたが四年の間よくお父さんお母さんを喜ばせ慰めてくれました、ほんとうに御禮申します。お父さんやお母さんは心通りにあなたへ盡せませんでした、それが殘念でなりません。」お母さんは「ほんとにさうです／＼、御禮申します、いゝ子でしたね、御禮申します」と、あなたのうつゝない手をしつかりとしつかりと握つてゐました。…………

一

恐ろしい病毒が突嗟に腦へ喰入つた。
お父さん
お母さん
けたゝましい叫びと共に、
子供は狂ほしい力をもつて母の乳を食ひ切らうとする。
醫者を迎ひに夜中の町へ駈け出し父のうしろから
お父さんお父さんといふ聲が追つかけてくる。
父は夢中で駈け廻つて醫者を伴れて來る。

悲しき日、一

おゝ、もう子供は覺め難い睡りに落ちてゐる。

二

しづかな〳〵呼吸(いき)のなかから
聲を限りの叫びが聞こえる、
かすかな〳〵脈のなかから
精(せい)一杯の力が感じられる、
あゝ、けれど
私達にはもうどうすることも出來ないのです。
どうぞ神樣。
きいてやつて下さい、助けてやつて下さい、

悲しき日、二

あの叫びを、あの力を。

三

「もう一言(ひとこと)
たゞ一言でもいゝから聞きたい」との母の祈りはきかれた。
二十餘時間意識のなかつた子供が、
迫りせまつた呼吸のなかで
「ねんねねんね」と云つてくれた。
おゝ、ねんね、ねんね
父は聲をあげて感謝した。
母は顔を掩ふて泣いた。

悲しき日 三

おゝ、おゝ

永い永い、さめないねんね。

四

しづかになり
遠くなり
微かになり
とぎれとぎれになり
おゝ呼吸は止んだ、ハタとやんだ。

いまのいままで頼みにした
その健やかな心臓が、
悲しき日、四

まだ肘のあたりで
ありなしの脈を搏ちながら。

五

信。あなたはこんなにも大きくなつてゐたのか、
こんなにも可愛いゝ顔してゐたのか。
おゝ、おゝ、そのおからだも、そのお顔も
もう見ることができないのか。

信。信。信。

（最後の枕邊にて）

六

その手が誰の手であるかも分らない
うつゝない子の脈をとりながら
くらいくらい祈りをつゞけて、
涙もなしに送つた夜ル
悲しみを通り越して送つた夜ル。

七

ふつと目がさめると、
薄ら明りの街から
おゝ、遠い自動車の音。

すさまじく騒々しいその響のなかに、
布團よ、枕よ、氷嚢よ、
も一度注射をして貰つて
サ、お母さんは信を抱(だ)いて

悲しき日、七

そつと、しづかに、さはらぬように、
「きつと癒つて歸るんだぞ」
父はかう叫んで最後に乘る、
矢のように病院へ
まだ人のけはひもない曉の街をまつしぐらに。

じつと眼をとぢると、
おゝ、まだ微かに聞こえてゐる。

墓

たとへそれはもう呼吸もしない脈も搏たない空しい一壺の遺骨でも、どうして我兒のそれをあの冷たい土の底へ埋め去ることができませう。私の心身の健康のために、遺骨を早く葬つた方がいゝといふ忠告に對しては、私はたゞ其好意を謝するに止めて居ました。

しかし振返つて家庭を見た時に、無心で笑つてゐる小さいものが目にとまりました。私は考へました、「この兒がものゝ分るようになつた時、この黑い布に覆はれたものから受ける感じは……、さうだ、子供の心に暗い影を翳してはいけない」、私はとうど、あのいたはしいものを地下に委しました。

■

去年の夏、私は父母の墓を秋田の山奥に訪ひました。しかもこの往復三百餘里の長い道を、私と一緒に旅したのは信でした。

私は自らもまた子孫も、同じく此の山中の松籟のもとに睡るのだと思ふて歸つたのですが、信に先立たれては、とても其遺骨をこの遠い淋しい地に送る心持になれませんでした。かうして彼は東京に於ける我家の墓の祖となりました。

■

これも子供の墓だ。

これも子供の墓だ。

かう云つて私達はよく信の墓へ行つた歸りにそれらのいとしい墓を見てあるきます。私達の心は愛と悲しさとで一杯になつてしまひます。殊に信の隣りにも子供の墓があつて、しかもその亡くなつた日が同じです。私はさびしい親しみをその子供、その家庭に感じます。(その人達にはまだ一度も遇つたことがありませんが)、一日ふと書肆の店頭でその子供のお父さん(小川未明氏)の書かれた「星の彼方より」といふお伽の本を見たら、卷首に「病める長女美津子へ」と書かれてありました。卷末を見ると、この書の世に出た日は、もうその子供の彼の墓に睡つた後なのです。私はたまらなく悲しくなつてそゝくさと店を出てしまひました。

一

雪が降る。
雜司が谷の墓地では、
新しい墓も、古い墓も
大きい墓も、小さい墓も
うちの信の墓も、隣りにある同じ日になくなつた幼兒の墓も
みんなこの雪を被つたらう。
墓守よ、箒をおいてお呉れ、
そのまゝで、おゝ、そのまゝで美しい日の照るように。

墓、一

二

私はお花をおくれと云つた、
茶屋の女は花より先づお茶を出しさうにした、
彼女はふと振返つて私を見た……子供をなくした父の顔を見た、
彼女はやさしく花をくれた。

三

花よ
さまぐの花よ。
お身を折る手をうらんでくれるな、
私はかたじけない心をもつて
神様とお身とに感謝する。
子供のお墓を飾りたいのだ
お身は美しく咲いてゝくれ、
人の世を美しくするために。

四

一鍬　二鍬　三鍬
小さな穴が掘られた、
こゝはやがてお父さんのお墓だ、
いまお母さんの讃美のなかに、
銀杏がそこへ植ゑられた。

一鍬　二鍬　三鍬
小さな穴が掘られた、
こゝはやがてお母さんのお墓だ、
いまお父さんの祈りのなかに
玉椿がそこへ植ゑられた。

おゝ、まんなかの新しい盛土よ
いとしい信の墓標よ、
いまから相寄つた二本の木
こゝろを籠めた二本の木
それにすつかりと抱かれて下さい。

五

マコちやん、マコちやん
ア、お父さんといふ聲がした、
したようだ。
目をあいて見れば
「金澤信之墓」。

六

マコちやん
お父さんは今日お墓へ參りません、
あなたはどんなにか淋しいでせう、
けれどもマコちやん、お父さんの
お墓へ來られないといふこゝろは
一層あなたを思はせてゐるでせう。
マコちやん、このお花の散らない内
お父さんはもつといゝお花を上げに來ますよ。

七

「ピーなんてやかましい停車場だね。」
おゝ思ひ出す、
この夏の長い旅の終り
こゝの電車のなかで
信はさう云つた。
ピー〳〵と
ほんとにやかましいその聲は、
いま信のお墓參りに行くこの傷んだ胸へ喰入つて鳴る。

八

お墓へ美しい花を飾つて
叮嚀に水をかけて
そして手を合せてゐた妻が、
「でも、こゝに信ちやんが居るとは思はれませんもの、」と。
おゝ、さうだ、
「お骨よ、さよなら」
「信ちやんはお家にゐるのだ」。

九

姉よ。池袋を過ぎるときは
東の車窓を開いて
雜司ヶ谷の冬木の杜へ目をやつて下さい。
そこには、貴女の愛してくれた信が
喪章のついた花環のなかから
小さな顔をあげて
信の懷しいお祖父さんお祖母さんに遇つて來た貴女を迎へて
ゐます。

信の戀しいお家へ歸る貴女を見送つてゐます。
姉よ。その時、信と一言呼んでやつて下さい。

こゝろ

■

この大きな悲しみに遇つて、さながら子供にかへつた心、すつかり單純化された心、そして何よりもそれに滿足して居る心。今私の眼には心には、あらゆるものが新たに最初の純な姿をもつて寫るのです。「むつかしい哲理だの、面倒な宗教だのは、そうっと行つてもらひたい、私はこのまゝで、たゞこのまゝでいゝのだから」。

「涙のでゝゐる内に顏を拭くな、」とは私の妻に云ふ言葉です。これが私の心持をすつくり現はして居ます。お前は涙に媚びてるのだと云はれるなら、私はその人には默しませう。

宮城のお濠端を見ると、六十年七十年恐らくはもつと年とつたような柳が、その逞ましいからだを小さな木に支へられてゐます、そしてその支へ木は七年十年決してそれより上ではない細い杉なのです。根はありても風にも堪へなくなつた年寄の柳は、その生命(いのち)をこの幼いものに托し、切られて枯れ死したと我等がいふ幼年の杉は、その力もてこの老いたるものを生かせてゐます。私にはあらゆる幼いもの小さいものに對して讃仰の念が湧きあがります。

■

私達はこゝへ自分のありのまゝの心をあらはしました。この六、七などを見ると我れながら恐ろしいような氣がします。しかし悲哀のどん底に陷つて、その谿(たに)谷の嵐に虐(さいな)まれた自分は、どうしてもこの叫びを叫ばねばなりませんでした。

暗黑の裡に居る者必ずしも光明を求めてゐるのではありません。私はこゝに安居して何者をも近づけまいと思ふことがあります。小さな人間としての愛と要求とを私は今日も叫ぶことをやめません。一三のような高踏的な心持に眞實なりきつた時もありました。今もさういふことがあります。けれども現在の自分として、神の名を呼ぶことはあまりに不遜だと思つて居ります。

一

悲しみよ
お前は愛の影だ、
お前といふ暗い影のなかに立つて
おれは、お前をつくる愛の日を仰ぐ。

二

人は泣くなといふ
人は諦(あきら)めろといふ
人は思ひ出すなといふ

私は涙の渇く日を悲しむのだ
私は心の落付く日を淋しむのだ
私は忘れ行く日を恐れるのだ。

三

泣きたい、泣きたい、たゞ泣きたい。
悟りも要(い)らぬ、救ひも要(い)らぬ
人間らしくたゞ泣きたい。
泣いて泣いて泣きぬいて
そのまゝ消え入つてしまひたい。

四

諦(あきら)めといふ惡魔が
又私の心へはいつて來た、
之と戰はねば、之を退けねば
信も私も救はれない。

五

私の求めてるのは地上の信だ、
血のかよつてるからだだ。
天國
靈
それではない、それではない。

こゝろ、六

六

「信ちゃんが居なけれァ何ンにもいやだ」
妻は突然疊へつっぷした、
刹那、
わたしは憤怒に燃えた
「誰だ、妻をこゝへ倒したものは誰だ」

こゝろ、七

七

靈なる信と倶に暮さうと思つたとき、
私は妻をも忘れてゐた
次ぎの子をも忘れてゐた、
おゝ、私はそれよりも
わが神をさへ忘れてゐた。
噫、一切のものを打忘れて
信のことを思ふてゐるとき

私はどんなに幸福だつたか、
もうその時もかへし難い。
私はなぜか生きてゐた。

八

おゝ、
おれはどうしてこんなに悲しみの歌ばかり覺えてゐたのだ、
あんなに歡喜の滿ちてゐたなかで
あんなに希望の輝いてゐたなかで
おれはなぜこんなあはれな曲ばかり覺えたのだ。
おゝ、別れの歌よ。

九

私の祈願(ねがひ)は、
私の死がどんなに急であつても
そのとき
一言でも信と呼びたい
たゞそれだけの餘裕がほしいのだ、
せめては信の影の心にさすまで、
刹那でも信の靈を心にとめて死にたいのだ。

一〇

天國が、どんなにいゝところだらうが
どんなに自由で、美しいところだらうが
信が私達を忘れないなら
そこは、決して信の爲めにうれしいところではないのだ。
そしてまた信が私達を忘れてしまふところなら
私達は決してそこを喜びはしないのだ。

二

ポケットにあるバイブル、
電車の中でも
道の端でも
常に披き
常によむバイブル、
たゞ墓場への往來にのみは
私はこれをも手にとらない、
たゞ一向に自分の聲を

こゝろの底から聞かうために。

二

私の心の影が信の寫眞を晴れさせる
私の心の影が信の寫眞を曇らせる。
信の寫眞の影が私の心を晴れさせる
信の寫眞の影が私の心を曇らせる。

三

わが掌にありしもの
いま神の掌に入り、
わが懐にありしもの
いま神の懐に歸る。
我れは忘るゝとも
神は忘れず、
我れは亡ぶるとも
神は亡びず。

思ひ出

親が子供の思ひ出を話すのを、他の人が聞いたら、なんといふ美化し、詩化して話すのだと思はれるかも知れません。しかし、子供の生涯そのものが即ち美であり詩であるとは詩人の既に云つてることとです。私は親のこゝろとして敢て云ひます、その詩人のいふ美、詩それよりも、親の思ひ出の子供は、もつと純なもつと美しい美、詩そのものであると。

旅 （昨夏、私が信を伴れて秋田へ行つた途次、汽車中から妻へ宛てた手紙の一節）

「お父さん、お日様はどこから出るの」信がだしぬけにかう云ひますから。私は何の氣なしに「山から」と答へました。すると「ハ、、、お父さん間違つた、山なんかどこにもないのに」と云ひます。見ると信はこつちの窓からむかふ側の窓へ行つて外を見て云つてるのです。「さうだ、お父さん間違つたね」私は降參しました、實際外は一帶の平野なのです。私はうつかり「お日様は山から」と讀本式な返事をしたのでした。

昨夜は上ノ山溫泉で、信は初めてお母さんの傍を放れて寢るのだからと心配しましたが、ちつともむつがりもせず。「恭ちやんはマコちやんが居ないから泣いてるでせうか」、「泣いてる」、「お母さんは淋しがつてるでせうか」、「さびしがつてる」なんて話しをしながら、いつものようにニコ〳〵して睡つてしまひました、私は今度の旅で一層此子が可愛くてたまらなくなりました。

おゝ信が又うまいことを云ひます、「鳥はバカだねえ」と云ふんです、「なぜ」つて聞くと、「雨が降るのに飛んでるから濡れちまふ」のださうです。三年と少ししか經たないといふのに、かういろんなことをよく覺えるものですね、今度歸りに日光から中禪寺へはおぢいさんもあなたも、みんなでこの可愛いゝ話を聞きながら行かれるのですね。……

一

一番あとで買つてやつて
そして一番氣に入つた玩具(おもちや)。
信の玩具の買ひ納めに
偶然あのお氣に入りがあたつたのなら
それはほんとにうれしいけれど、
もしや信が玩具の持ち納めに
たゞその爲にあんなに喜んだのだつたら
それはなんといふ悲しいことだらう。

思ひ出、一

二

階段の手摺に摑まつて
踏み辷りさうにしてはふみ止まつて
「マコちやんえらいね」とやつてくる信はないか。

柱をクルクルまはりながら
柱が廻るか自分が廻るかわからなくなつて
「マコちやん目がまはる」と云つてくる信はないか。

足もとの碁盤目をひろひながら
一ツ二ツ三ツ、一ツ二ツ三ツ、それで大得意で
「マコちやん數へた」と叫んでる信はないか。

ポーと汽笛が聞こえると
慌てゝお父さんの手をひつぱつて
「マコちやん伴れてつてあげる」といふ信はないか。

（信濃町停車場にて）

三

朝の戸は
しづかに繰る、
子供の夢の消えないように
キシ〳〵と
呼ぶようにして
母が繰る。

夕の戸は
にぎやかに繰る、
子供も一緒に押しやつて
カラ〳〵と
追ふようにして
父が繰る。

四

座敷一杯に玩具(おもちや)をひろげて
一日一人でそれで遊んで、
そして、お父さんが歸る頃には
すつかり一人で片付けて
おとなしく御褒美を待つてゐた、
あの心持を思ひやる。

五

雪が降る
面白いように雪が降る。
マコちやんが今日も居つたなら
このまつしろいものを嘸喜んだらう。
去年や一昨年(おとゝし)は赤ン坊でなんにもわからなかつたのだ。
さうだ、
今年は白を青と間違へて居たのだから
きつと「青いねエ」と云つたらう。

そして、お父さんやお母さんがそれを笑ふと
自分もわけは分らずに一緒になつて笑ひ轉けて居ただらう。

六

行くときはあるかせて
かへるときは抱いてくる、
行くときはお月様のお話して
かへるときはお星様のお話する、
信と二人で行き馴れた
一町ばかりの湯屋への道。

七

お膳に御飯をこぼす人がなければ
お庭へそれをはたく人もなくなつた、
毎日それをたべに來た
雀も嘸や淋しがらう。

八

お歌の本を買つて來たら
表紙の子供の繪を見付けて
これは信ちやんのだと喜んだ、
その本のお歌を半分ほど覺えたばかりで
信ちやんはもう睡つてしまつた。

九

「お父さんおッぱい」とすつかり摑まつて
恥しさうに、それで心からうれしさうに、
ヒシと身體をだき締められて、
男のしなびた乳の兩方を
痛くなるほど吸ふたのは、
あの大病の前の晩であつた。

一〇

赤ちやん
あなたがよう〳〵兄ちやんのお顔のわかつたころ、
マコちやん
あなたがよう〳〵赤ちやんの可愛いさが分つた頃、
そして二人が顔をあはせるとすぐニッコリと笑ひあつたころ、
おゝ、その頃二人は別れてしまつたのです。

二

お父さんのお膝にも
二人はとても乘らなくなつた、
マコちやんが恭ちやんを抱つこして
それを又お父さんが抱つこして
三つの顏が重なつて
あの姿見へ寫つたのだ。
せめていまあの重みだけでも
この淋しい膝へ感じたい。

三

信に初めて乳を含ませた時から
信が初めて光りを見た時から
いゝえ、もつともつと前の前から
子と母とはこの悲しい運命に置かれたのでせうか、
私はそれを信じたくない、
けれども信じなければならない。

一三

信は弱かつた、
光りを見て十日經つても、泣くことができなかつた、
悲しいことになつたなら、それにふさはしいようにとさへ思ふて、
名前もきめなかつた。
さびしいくらい不安のなかで
父と母とは祈つて祈つて
信といふ一字を得た、
たゞすべてをみ旨のまゝにと。

あゝその神を、我等が神を
今、父と母とはたゞおそれて見る、ふるへて見る。

一四

湯たんぽをとりかへてやつたら
すぐに赤ン坊は三十九度の熱になつた、
あはてゝその一本をとつて置いたら
間もなく今度は三十五度に下つてしまつた。
そして、耳をどんなに側にやつてもその呼吸は聞かれない
その脈はいろ〳〵にして見ても感ずることが出來ない、
父は觀念しながらも、
この冷たい動かない子供を懷へ入れて

晝に母のしてゐた産枕にかゝつて
夜半の一時から明けかゝる四時まで祈りつゞけた。
その時小さな泣聲がして
ふところの手足が少し動いた、
父は思はず疲れ切つて睡つてゐる母を呼び起した、
二人は跪いて神に感謝した
信といふ名はこの時きまつた。

一五

産聲をあげたのも
日曜の曉の三時、
お父さん、お母さんと最後に呼んだのも
日曜の曉の三時、
日曜の曉の三時、
あゝ、日曜の曉の三時。

一六

淡い雲だ
一杯に日を受けて
柔和に光つて
急ぐけれども亂れずに、
笑つて過ぎた、
おゝ、さながら美しい子供の生涯

一七

一こそ又なく純なる文字
一こそ此上なく尊き文字
たゞこの直なる美しき
一てふ一字を書きのこして
睡れる兒よ心あらん。

きのふけふ

■

子供の可愛さは、持つて見なければ分らない、育てゝ見なければ分らないと人は云ひます。けれども私は言ひます。「ほんとうの子供の可愛さは、なくして見なければ分らない」と。この怏からぬ言葉をゆるして下さい。かうした痛々しい經驗のない方には、嘸いやなひゞきを傳へることゝ思ひますけれど、私としては言はないでは居られない言葉です。

私は今でもさうですが、殊に信を喪つた當時は、道の傍にゐる子供や、電車に乘つて居る子供や、知つてる子供でも、知らない子供でも、子供さへ見ると、「あ、此子は死にはすまいか」と思はれてなりませんでした。私は今も機會さへあれば、ふと電車へ乘合せたといふだけの人へでも、子供について自分の氣の附いてることを話すことを喜びます。或人は熱心に聞いてくれます、さうでない人もあります。私は「自分の子ですもの、云はれなくても可愛がつて居ますよ」などゝ云はれながらも、「子供を愛せよ、もつと愛せよ、滿足することなくもつと愛せよ」と高唱します。

■

信と別れてから、もう半年餘り過ぎました。この書の大部分は、その初めの二ヶ月ばかりの間に書かれたものです。ほんとうに逼迫した心持、それが其まゝに言葉となつたのですから、私達としては、今も讀み返して涙の湧くものが多いのです。そのぎごちない言葉や調子も、一句すら替えようとは思はないのです。そのように私達のこゝろも殆ど變化して居りません。雜多な思想がこんがらかつてゐますが、それは昨日から今日への推移をあらはしてるのではなく、昨日も今日も同じように私達の心の隅々を占めて居る各々の聲なのです。

一

世界中の子供が
みんないとしい氣がする
みんななつかしい氣がする。

道で小さな柩にあへば拜んで行く
家をよそのおもちやで一杯にして喜んでゐる。

世界中の子供が私の子供になつたような氣がする

きのふけふ、一

私の子供が世界中の子供になつたような氣がする。

二

世の祝の日は、わが呪の日。
世の喜びの日は、わが悲しみの日。
さう云はうと思ふてハッとした。
やさしい坊やの靈(たましひ)が
この頑(かたく)なをよろこぶか。

三

此間このベンチで遇つた人
知らぬ人だが、なつかしい人だつた。
それにその子供がおとなしくて、
「嬢ちやんこれだけ」と私が片手を開いたら
「いゝえこれだけ」と一本伏せて見せたつけ。
亡くなつたうちの坊やも恰ど四つ、
さぞあんなお友達がほしかつたらう。
そのお母さんだといふだけでも

あの人はなつかしい人だつた。

四

床へはいつて、
しめやかに
けれども涙を流すのではない、
亡くなつた子供の
おとなしかつた話
かしこかつた話
美しかつた話、
あんなに愛された子供のしあはせ
あんなに愛し得た身の果報、
それを繰返し話しあつて
しんから落付いてゐるのだが、
さて二人の内一人がさきに睡つてしまへば、
あとの一人はぽつねんとして
急に淋しくなつて泣いてしまふ。

五

めい〳〵に默り込んでゐるが
めい〳〵に同じ涙をもつてるのだ、
誰かが一言をいふと
それがみんなの涙の線へふれるのだ。

六

このまゝ私が寝入つてしまつて
そしてもう覺めるときがなくつても、
なんにも心殘りのない程に
私は今日は幸福です、喜んでゐます、　感謝してゐます。
マコちやんのことを思ひ出して
かうも涙がつきないから。

七

日が隣りの教會堂の家根に照り
信(まこ)ちやんの樂園であつたお庭に照り
お馬をかけらしたお椽に照り
ガラス障子を透して机の花に照り
花の蔭の信ちやんが形見の寫眞に照る。
涙にぬれた私の目の前に
日があか〳〵とのぼつて來る。

（告別式の日の朝）

八

マコちやんの額(がく)の前に立つと
そのガラスに私の影がうつる、
恭ちやんを抱いて立つと
恭ちやんの影もうつる、
凝視(みつ)めてゐると信もさながら浮き出て見える、
額のなかに、ガラスの奥に
伸びるにまかせた髯の顔と
赤い衣服(きもの)を着た無心の笑顔と

可愛いゝ洋服を着た柔和な顔と
おゝ話し出しさうだ。

九

赤ちやんにも
悲しい日があつて
朝から晩まで泣いてる日がある、
そんな日は
きつとみ空にゐる兄ちやんが
赤ちやんを忘れてる日なのだらう。

一〇

お父さんも淋しい
お母さんも淋しい、
けれども
誰よりも淋しくなつたものは恭ちやんです。
毎朝そこへつれて行くと
お寫眞のマコちやんのお顏へさはつて
ニッコリして飛び立つて喜んでゐます、
よその子供を見たときにも
あんなに躍りあがつてうれしがります。
あゝマコちやんが居たら、マコちやんが居たら
私は恭ちやんの育つてゆくのが恐ろしいようです。

二

「赤ちゃんの寝顔をごらんなさい
亡くなつた坊やにそつくりですよ」、
妻はかうして
あらゆるものに信を見、
信をすべての思出として
そして涙で慰めて行くのだ。

三

「信にそつくりの子供を見たい
そして信を偲びたい」
と妻がいふ。

「その顔ばかりも似た子がなくつて
信はほんとにたゞ一人だと思ひたい」
と私はいふ。

三

マコちやんが居なくなつてから、
或る朝
一匹の蟋蟀(きりぎりす)が
霜に枯れた草のような羽をして
マコちやんの寫眞の傍(そば)で死んでゐた。

それから或る朝
一羽の小鳥が
凍りついた石のような眼をして
マコちやんのお庭の隅へ落ちてゐた。

また或る夕
一匹の小犬が
今にも絶えさうな聲をして
マコちやんのお椽の下で啼いてゐた。

私はその蟲を藏(と)つて置いた、
私はその小鳥をマコちやんの花塚の中へ葬つてやつた、
そして、
私はその小犬を家の外へ追ひ出した。

私はなぜ死んだものをあんなに劬(いた)はつて
生きてるものにあんなに無慈悲をしたらう、
私はマコちやんの前てそれを泣いた。

一四

信のいたづら書きが
もつとどの本のなかにかあるのを夢みた、
すぐ明(あ)くる一朝(ひとあさ)それをたづねた
そして無いのを不思議がつた。

信の穿いてゐた靴が
何かに破られたやうな氣がしてしようがなかつた、
さつそく記念筐(かたみばこ)から取り出して見た

そして何の變りもないのでホッとした。

一五

クリスマスが來た、クリスマスが來た、
何ンの不足もない天國でも
子供は、やつぱり
サンタクロースのお爺さんを待つだらう。

一六

クリスマスの木の天邊(てつぺん)に
大きな人形をくつつけて、
「これがマコちやんだ
うちのマコちやんだ」、
何度もさう云つて
お父さんは手を拍(う)つて見た。

一七

クリスマス、クリスマス。
あの鐘の聲のなかに
あの歌のなかに
信の睡りが覺めはしないか、
奇蹟が行はれて
信は歸つて來はしないか。
おゝクリスマス、クリスマス。

一八

マコちやん。
お父さんは、今、あなたの行つて居た日曜學校へ行きます、
そして
あなたのようにおとなしく
あなたのように素直に
しんからいゝお話を聞いてきます。

マコちやん。

お父さんはあなたの行つた道を行つて
あなたの踏んだ階段を踏んで
あなたのかけた椅子へかけて
そして
あなたのように歌つてきます。

一九

お父さんは歌ふとき
マコちやんのお寫眞の前へ立つて
マコちやんを凝視めながら歌ふ、
この時お母さんのオルガンが
マコちやんのお歌を彈かうものなら
お父さんはマコちやんのようになつて
あたりもなにも忘れてしまつて
せい一杯の聲して歌ふ、

お父さんののんどが顫へてきて
自然に涙が流れるまで歌ふ。

二〇

病み疲れて妻は眠つた
泣き疲れて子は眠つた、
外はしん〳〵と雪が降つてゐる、
寒さが額から腦へ沁みこんでくる、
そツとなくなつた子の寫眞をとり出して
二人の寢顔と見くらべてゐる
わが二十八の年の暮。

二一

抱き寢に馴れた左枕
苦しい、けれども懷しい左枕
子供の居ないこの夜頃の
目覺め勝な左枕
枕の下の名殘の蟲の聲。

三

「なんぢら心に憂ること勿れ」
自ら選んで原稿紙に
藍刷させたこの文字、
悲しさに顫へるペンを落す時
淋しさに紙を涙にぬらす時
「なんぢら心に憂ること勿れ」。

（新約、約翰傳第十四章起句「なんぢら心に
憂ること勿れ神を信じ亦われを信ずべし」）

夢

■

夢は或場合、まだ知ることの出來なかつた自分自身の正しい姿を見せるものだと思ひます。私がつまらない、ほんとうに夢のような夢ばかり見てゐながらも、それを床の中ですぐ書きとめて置いたのは、そんな考からでもありました。

■

信と別れてから三十三日目に、始めて私は信の夢を見ました、妻はもつと後でした、「信の夢を見たい」とは二人の切な願であつたのです、じつと信の寫眞を見て床に就きます、どうぞ夢みるようにと、けれどもどうしても見ませんでした。その後とても自分の望んだ時に夢みた事は殆どなく、こゝに書いたものゝ外には二度ぼんやりした夢を見ただけでした。

「せめて夢にでも」といふ親のこゝろが、このような夢を見たといふことを記念したいために、つまらぬようなものも捨てませんでした。

■

夢、私はこの夢の記事を以て、この書の編纂を終るのです。世に出すこゝろもなく書き來つたものが、かうして今公けにされようとしてゐることも夢のようです。

ほんとうに夢うつゝのこゝろを以て今日に到りました、夢のような心を以て現實（うつゝ）の道を歩いて來たのでした。夢か、夢といふべくあまりに悲痛な事柄ではありますが、儚ない慌（あわただ）しい心持を[illegible]うも呼びませう。

一

可愛い小さい手をあげた
先生は指して「あなた」と云つた
四つになつたばかりの信（まこと）ちやんは、手をあげることより知らなかつた、
側にゐた伯父さんは、小さな聲で「ペテロと云へ」と敎へた
信ちやんは立つて「ペテロ」と云つた。

お父さんのゆふべの夢のなかに、

夢、一

夢、一

み國へ召された信ちゃんが
ペテロの膝へ乘つてゐた。

二

戰捷祝賀の行列が來た
歌が來た、旗が來た、提灯が來た
早く〳〵信を呼んで來よう、
息を切らして驅け出して
行列の先頭へつきあたつて
ア、信は居ないと氣のついたとき、
あゝ、それは夢であつた。

夢、二

三

青山の原の、なんぢやもんぢやの樹の下に私は居た。
目の前に一人の男の子が遊んでゐた、
此子は、外に友達は見えないが
私の伴れて來たのでもなかつた。
私は自分の子供のなくなつたことを思ふて居た、
そして、そこに居る子をなつかしい目で見て居た。
私はその子を呼んだ、
その子は恰ど信ちやん位のからだを
――その立つてゐての肩を私の坐つてゐる肩へ――
あツたかくぴツたりとつけた、
私はその子を抱いた、赤ン坊を抱くように抱いた。

私は小さな二つの手を弄つて居た
その柔かい指を飴のようにしやぶつて居た、
それから、私の髯を引ツぱらせて見た
信ちやんのなぶつた私の乳をなぶらせて見た、
その時私はふと氣がついた、
おゝ、この手は信ちやんの手だ、
この子のよその子であることは分つてゐる
けれどもこの手は確かに信ちやんの手なのだ、

間違ひようもない——賢こさうな、柔和さうな、幸福さうな、ふっくらした信ちやんの手なのだ。
私はその兩手を握りしめた。

「あなたは何がほしいのだ
え、ほしいものならなんでもあげよう、」
「おゝ、さうか、ネクタイか、
信ちやんのお醫者さんへあげるときに、同じのを買つた、この記念のネクタイか、」
「あげよう、あげよう
その可愛いお頸へまいて上げよう。」

子供はニツコリ笑ふなり
長いネクタイをひらつかせて
一目散にかけ出した、
今まで見えなかつた一軒の家が
眼の前に、門を開いてその子を迎へた。
私は突如立ち上つた、
——あの可愛い信ちやんの手はどうした
確かに信ちやんの手であつた、あの私の握つてたものはどうしたのだ。——
私は氣でも狂つたように
なんぢやもんぢやの樹の下を
グル〳〵グル〳〵と驅け廻つた。

呼ぶことも叫ぶことも忘れてただ驅け廻つた。
右にも、左にも、私の懷のなかにも信ちやんの寫眞があつた、
信ちやんの手はそこにあつた、
あゝ、私はゆふべ子供のやうに泣いたまゝて睡つたのだ、
今、夢がさめてみると
枕がしつとりと濡れてゐる。
信ちやんがなくなつてから
明日で百六十日になる。

四

華やかな明りがパッと消えて
嚴そかな闇が犇(ひし)と身を包むと、
前から後から右から左から
蹄の音、車のひゞき、人の叫び
遠く近く一齊に自分へ迫つて來た
十重(とへ)に二十重(はたへ)に圍んで來た。

打倒れた大地は一面の雪だ、

私の足は凍えて起たない
戰きながらふるひながら
たゞ「神よみ旨のまゝに爲したまへ」と。

忽にすべての音がなくなつた、
光りはないけれども暗くはない、
雪は冷たさを失なつた、
私は少し身を起さうとした。

すつと背中へ上つたものがある
まる〳〵とした二つのものを私は見た、
摑まうとして力が足りない

二つのものは行き過ぎようとする、
ア、信の足だ
叫ぶと共に夢は覺めた。

五

ゆふべ私は山の上、海のなか、地の底をくゞつて信を尋ねた。
信がなくなつたことは分つてゐた、
しかしその時の私の考では、
信は神樣のみ手へ靜かに歸つたのではない
惡魔が奪つて行つたのだから、
私はどうしてもそれを伴れ戻して
そしてすつかりと神樣のみ手へお預けしようと思つたのだつた。
私はあらゆる難儀をしたが

信を見つけることは出來なかつた、
私はすつかり喪心したようになつて
いつか家(うち)の戸口に立つてゐた、
そして涙を瀧のように流しながら
信、信と呼んだ。
その時、信が
――ありし日のような可愛い信が――
飛んで私の方へ來た、
私は靴のまゝでうちへ跳(は)ねあがつた、
私は外套を一杯にひらいて
そのなかへすつかりと信を抱(だ)いた、
「あゝかうして居たい、いつまでもかうして居たい」

「神樣このまゝで置いて下さい」と祈つた、
私はそれが夢であることに氣がついた、
そしてこの夢のさめかゝるのを
さめたくない、さめたくないと思つて居た、
あゝ、さう思ひながら夢はさめた。

大正八年七月十一日印刷
大正八年七月十六日發行
大正八年十二月十六日再版
（小草）定價壹圓

著作者　金澤甚衛
同　金澤まつ子
東京市神田區南神保町二
發行者　福岡易之助
神田區中猿樂町七
印刷者　渡邊市太郎
同所
印刷所　中外印刷工業株式會社

發行所　東京市神田區南神保町二
白水社
振替東京一一九二二番

不許複製

世評二三

護教（舟橋青山學院教授）

これは幼兒を失つた若き夫妻の涙の記錄である。筆まめなブツクメーカーのすさびらしい片言隻句もない。全篇唯是僞る事を知らざるふたりの魂の告白である。共に泣て慰めを得んとする人々に心から此書を推薦する。『信よ』。『悲しき日』。『墓』。『こゝろ』。『思ひ出』。『きのふけふ』『夢』の七章に分れた八十一篇の短詩と、章毎に加へた前置の散文とを通して、所謂『信ちやん』の面影を躍如たらしむると共に、著者兩氏の深い信と愛とを偲ばせる。そして讀者は豫て形容を用ひず、何等バランスを保たざる詩句に最も多くの感激を催すのである。

（思ひ出一拔載）

讀賣新聞

……前略……

亡き子を思ふいたましき深き情緒凝結して、この美はしき文字をなす。同じ不幸に遭遇せる親達の慰安の讀物として最上のものならん。

東京朝日新聞

愛兒を喪ひし親心をありのまゝに現はせる小册子なり。哀悼の詩數十篇の間に亡兒の生誕より永眠に至る經過を叙す。全篇これ眞情の流露にして斷腸の叫びならざるはなし。然も著者の信仰は亡兒の永生を信じ、其再會の希望に涙の眼の輝けるを見る。

婦人新報

……前略……

よく何とか云うて勵ましたり、なぐさめたりいたします。愛兒を失うた母に、父に、對して。

でもそんな勵ましの言葉より、慰めの爲の訓しよりも、愛兒喪うた父母、は一緒に泣いてもらうがうれしいのです。

著者は其「はしがさ」に

共に泣かうために
たゞ共に泣かうために
同じ涙をもつ多くの人々のものとしたい心から
この愚かしいものを公げにします。

とあります。

愛兒を失はれた友に贈る本として此『小草』を心からおすゝめします。